『平家物語』における平維盛

―〈家〉との関わりから―

長谷川靖子

一、はじめに

平維盛は平清盛の嫡子・重盛の長男で、平氏の嫡流として生を受けた人物である。初出の巻一「吾身栄花」では「嫡孫維盛」と語られ、繁栄を極める平家一門において主要な人物として登場している。

しかし、彼は平家の嫡流でありながら一門の長の座に着くことなく、物語後半は平家の集団から離れて孤立し、密かに那智の沖に身を沈めるという悲劇的な最期を迎える。滅亡の運命に翻弄される平家の人々の大半が合戦の場で討死や自害、あるいは生捕にされ最期を迎えるのに対して、維盛においては同じ翻弄されるのでも他の人々とは異なる物語が展開されるのである。

維盛という人物が描かれる際、常に彼につきまとうのは妻子への愛執である。維盛は巻七「維盛都落」で妻子と泣く泣く別れて以後、ひたすら妻子に心をそそぐようになる。妻子を想うが故の苦悩から逃れるために出家・入水に至るのである。したがって、維盛の人物像を考える際、この妻子への愛執というのははずせない要素であろう。実際これまで提出されてきた維盛論の多くがそれを軸に論を展開している。しかしながら、『平家物語』全体から維盛を捉えようとするとき、妻子との関係性しか描かれないかというと実はそうではない。

父・重盛生前の維盛は、ほぼ父に付随するかたちでの登場であり、平家の嫡流として父との関係性が色濃く出ている。その重盛を父に持つ資盛ら小松家の弟たちの存在も物語のあちこちに見え、維盛を捉える上で欠かせない要素であろう。また救いを求めて高野山に向かった維盛は、与三兵衛重景と石童丸、舎人の武里の三人の従者を召し連れていくのだが、中でも与三兵衛重景と石童丸は維盛と共に出家・入水していく人物である。維盛に最後の最後まで寄り添う存在といえるだろう。

本稿では、物語全体における維盛の登場場面を踏まえつつ、重盛を父に持つ小松家の弟たちとの関係、また最期を迎える高野山での従者たちとの関係を考察し、今まで看過されがちであった『平家物語』における維盛の人物像を捉えていきたい。

二、巻七「維盛都落」以前の維盛

先に触れたように維盛の初出は早く、巻一「吾身栄花」において平家首脳陣の中にその名を確認することが出来る。しかしなが

ら巻七「維盛都落」で妻子との別れの場面に至るまではその存在感は極めて薄い。登場場面自体が少ないばかりでなく、登場したところで名前が挙がるばかりで維盛に焦点が当てられることはないのである。

巻三「医師問答」で父・重盛が死去するまでの維盛の登場場面の一例を引いてみると、

小松のおとど（重盛）、直衣に箭おうて、供奉せらる。嫡子権亮少将維盛、束帯にひらやなぐひおうて参られけり。

（①巻一「内裏炎上」八九頁）（注1）

小松のおとどは、其後遥かに程へて、嫡子権亮少将維盛を車のしりに乗せつつ、…　（①巻二「小教訓」一一八頁）

小松のおとどは、例の善悪にさわがぬ人にておはしければ、其後遥かに程へて、嫡子権亮少将以下、公達の車共、みなやりつづけさせ、…　（①巻三「御産」一九六頁）

と、常に父に具せられての登場である。天皇の供奉や中宮徳子の御産の場面など、重盛が維盛を同行させているのは公的な場や平家一門にとって重要な場面であり、嫡子・維盛に対する期待の大きさが窺われる。すなわち、重盛は維盛が嫡子だからこそ様々な重要場面で人々に見せておく必要があり、またそのような場を経験させておきたかったのであろう。この点について宮田尚氏（注2）は「（重盛は）維盛に対しては、折にふれて、いわば〈帝王学〉を学ばせようとしたふしがみえる。」と指摘しておられ、異論はない。実際、このような維盛に向けられた父の期待感は「御辺は人の子共の中には、勝れてみえ給ふなり」（①巻三「無文」二三三頁）とのことばとなって現れている。登場の度に繰り返される「嫡子」ということばの通り、「小松殿」と呼ばれた重盛率いる小松家の長男として、平家の嫡流という将来を担った存在としての維盛像を見出すことが出来るであろう。

父・重盛の死後の維盛の登場場面を見ると、「大将軍には小松権亮少将維盛」（①巻五「富士川」三九四頁）と、富士川合戦における大将軍としてその名が見える。しかしながら戦場での彼の姿はほとんどなく、わずかに二箇所、部下の侍大将上総守忠清や斉藤別当実盛と戦局に関して問答する場面があるものの、

大将軍権亮少将維盛、侍大将上総守忠清を召して、「ただ維盛が存知には、足柄をうちこえて坂東にていくさをせん」とはやられけるを、上総守申しけるは、「福原をたたせ給ひし時、入道殿の御定には、『いくさをば忠清にまかせさせ給へ』と仰候しぞかし。…（中略）…ただ富士河をまへにあてて、みかたの御勢をまたせ給ふべうや候らん」と申ければ、力及ばでゆらへたり。

（①三九九頁）

又大将軍権亮少将維盛、東国の案内者とて、長井の斉藤別当実盛を召して、「やや実盛、なんぢ程の強弓勢兵、八ケ国にいか程あるぞ」と問ひ給へば、斉藤別当あざわらッて申しけるは、「さ候へば、君は実盛を大矢とおぼしめし候歟。…

（①四〇一頁）

と、ここでは実際の戦場で戦った経験のない大将軍・維盛の意見は聞き入れられず、「実践に対しては全く経験不足の維盛」が露呈している（注3）。また、この富士川合戦では平氏軍は水鳥の羽音を敵の襲撃と勘違いして逃げ出してしまい、大将軍を担っていた維盛は祖父・清盛の怒りを買うこととなったのだった。その後、維盛は木曽義仲追討のために北国へ赴くも（巻七「北国下向」「火

打合戦」）義仲の奇襲に遭い、倶利伽羅峠でほぼ全滅の惨敗を喫する（巻七「倶利伽羅落」）。七万騎いた軍勢がわずか二千騎になった倶利伽羅峠での平家軍の痛手は大きく、続く平家一門の都落ちの契機となる敗戦であった。

重盛の「嫡子」として父の存在に伴って登場する維盛。あるいは平家の嫡流として大将軍に抜擢される維盛。小松家の「嫡子」として、平家の嫡流として、〈家〉との関係性においてのみ語られるのが巻七「維盛都落」以前の維盛という人物である。嫡流という一族の将来を託された存在としての維盛だが、そんな彼の大将軍としての度重なる敗戦は否応無しに彼を苦しめたことであろう。〈家〉を背負う重責と、託された責務を果たすことの出来ない無力感が維盛には重く伸し掛かっていたのである。

三、維盛の妻子

ようやく維盛個人が焦点化され、その人格や心情が描写されだすのは巻七「維盛都落」からである。維盛は取りすがる妻子を振り切って断腸の思いで都落ちする。ここで、維盛が北の方に対して「いかならん人にも見えて、身をもたすけ、をさなき者共をもはぐくみ給ふべし」（②巻七「維盛都落」六七頁）と自分亡き後の再婚を勧めているのは極めて特殊で、川田正美氏（注4）は「こんな時の通常形態たる出家の道を選ばせず」「再婚を強調した」ことに彼の特異性を見出し、「彼独自の信念」と位置付けておられる。

また、平家の人々のうちで都に妻子を残して都落ちしたのは実は維盛のみであったらしく、「平家は小松三位中将維盛卿の外は、大臣殿以下妻子を具せられけれども」（②巻七「福原落」九〇頁）と語られている。妻子への愛情が人一倍強い維盛が、彼らを都に残した理由は「道にも敵待つなれば、心やすうとほらん事もありがたし」（②巻七「維盛都落」六七頁）という道中の危険だけではないだろう。都落ちの道中の危険は大臣殿の妻子たちにしても同じである。維盛が妻子を残して都落ちしたのは、「北の方と申すは、故中御門新大納言成親卿の御娘也。」（同六七頁）とある通り、維盛の北の方が鹿谷事件で捕まった謀反人・成親卿の娘であったことが大きいであろう。そもそも維盛の父・重盛も成親卿の妹を妻としており、捕縛された成親卿を助命すべく清盛を説得してもいる（巻二「小教訓」）。このように謀反人・成親卿との姻戚関係にあることが小松家を平家一門の中で孤立させる大きな要因の一つとなっており（注5）、維盛はそんな中に妻子らを召し連れていくのを避けたのであろう。

維盛の妻子は謀反人と血縁関係にあることを理由に平家一門から孤立した、いわば平氏の〈家〉から切り離された存在と考えることが出来よう。平家の嫡流という重責に苦しめられる維盛にとって、妻子らとの関係は〈家〉の重圧から解放され得る場であり、彼の心の拠り所だったのではないだろうか。都落ち以後ひたすら妻子に心をそそぐ人物として描かれる維盛。彼は〈家〉から離れたところに安息を求め、そこに傾倒していったのである。

四、維盛と弟たちとの距離

平重盛には、維盛を始め、資盛・清経・有盛・師盛・忠房・宗実という七人の子息がいる。維盛には、早くに養子に出された末弟の宗実を除いて、五人の弟がいるのだ。資盛以下五人の弟たち

の登場場面を追うと、いずれも平家一門と行動をともにする人物として名前が見える。すなわち、度重なる敗戦により都を離れることを余儀なくされた都落ち（巻七）から、続く三草合戦（巻九）、藤戸での海上戦（巻十）、そして平家の人々が次々に四国の海に沈んだ壇ノ浦合戦（巻十一）にその姿を確認することが出来る。

石母田正氏（注6）は、維盛の父・重盛を「運命を自覚し、予言する特別の人間」として造型された人物と捉えた上で、その子息たちについて「平氏の一族全体がそうであるが、とくに重盛の子孫は、この運命の予言者の言葉をそのまま体現したものとして、物語の中では重要な位置をあたえられている」との重要な見解を示し、とりわけ次男の資盛と三男の清経を挙げている。すなわち、資盛は巻一「殿下乗合」で「これこそ平家の悪行のはじめなれ」（①六六頁）とされた事件の当事者として、清経は建礼門院に「心憂き事のはじめにてさぶらひし」（②灌頂巻五二〇頁）と言わしめた人物として登場している。

また、彼ら兄弟の登場箇所をそれぞれ追おうとすると、実は先に挙げた資盛と清経を含め兄弟揃って行動していることの方が圧倒的に多いことに気付く。以下、維盛の弟たちの登場箇所を確認していく。

A　世の乱れそめける根本は、去んじ嘉応二年十月十六日、小松殿の次男、新三位中将資盛卿、其時はいまだ越前守とて十三になられけるが、…（中略）…資盛朝臣をはじめとして、侍ども皆馬よりとッて引きおとし、頗る恥辱に及びけり。資盛朝臣はふ〳〵六波羅へおはして、祖父の相国禅門に此由うッたへ申されければ、入道大きにいかッて、…

（①巻一「殿下乗合」六二～六三頁）

Aの巻一「殿下乗合」は、重盛の次男・資盛が摂政其房の車と揉め事を起こして乱暴され、祖父の清盛が後日武士を使って基房の一行に仕返しをしてしまうという事件を描いたものである。「摂政関白のかかる御目にあはせ給ふ事、いまだ承り及はず。是こそ平家の悪行のはじめなれ。」（①六六頁）と、平家滅亡への最初の契機と位置付けられており、先述の石母田氏の指摘通り重要な章段であろう。しかし、ここでは清盛と重盛の反応の対比に重点が置かれており、事件の当事者である資盛自体はほとんど登場しないのである。

B　小松のおとどは、例の善悪にさわがぬ人にておはしければ、其後はるかに程へて、嫡子権亮少将以下、公達の車共、みなやりつづけさせ、色々の御衣四十領、銀剣七つ、広蓋におかせ、御馬十二疋ひかせて参り給ふ。…

（①巻三「御産」一九六頁）

C　又下向の時、岩田川を渡られけるに、嫡子権亮少将維盛以下の公達、浄衣のしたに薄色のきぬを着て、夏の事なれば、なにとなう河の水に戯れ給ふ程に、浄衣のぬれてきぬにうつッたるが、偏に色のごとくに見えければ、…（中略）…しかるに此公達、程なくまことの色を着給ひけるこそふしぎなれ。

（①巻三「医師問答」二二七～二二八頁）

Bは重盛が中宮徳子の御産見舞いに維盛以下全ての子息たちを召し連れて徳子への献上品を納めている場面である。Cは、重盛の熊野参詣に同行していた子息たちの衣服が川遊びで濡れ、重盛死去を暗示するかのような喪服色に変わったというエピソードを伝えたものである。B・Cともに維盛以下小松家の兄弟が一括りで扱われている。

D　さる程に、御弟新三位中将資盛卿、左中将清経、同少将有盛、丹後侍従忠房、備中守師盛、兄弟五騎、乗りながら門のうちへ打入り、庭にひかへて、「行幸は遥かにのびさせ給ひぬらん。いかにや今まで」と声々に申されければ、

（②巻七「維盛都落」六九～七〇頁）

Dは、都落ちに際して妻子との別れに手間取り、出立の遅れていた維盛の許へ、資盛以下五人の弟たちが兄を迎えに来た場面である。「行幸は遥かにのびさせ給ひぬらん。いかにや今まで」と急き立てる弟たちだが、別れを嘆き合う維盛親子の様子を見て皆もらい泣きする。

E　さる程に小松殿の公達は、三位中将維盛卿をはじめ奉ッて、兄弟六人、其勢千騎ばかりにて、淀の六田河原にて、行幸におッつき奉る。大臣殿（宗盛）待ちうけ奉り、…

（②巻七「一門都落」八五頁）

Eは、Dで出立の遅れていた維盛と合流し共に都落ちした小松家の兄弟六人が、揃って帝や宗盛のいる一行に追いついた場面である。

F　小松殿の三男左の中将清経は、もとより何事も思ひいれたる人なれば、…（中略）…閑に経よみ念仏して、海にぞ沈み給ひける。

（②巻八「太宰府落」一一九～一二〇頁）

Fでは、太宰府を逃れ流浪することを強いられた平家の今後を嘆いた清経が入水し、一門の人々に衝撃を与える。先に石茂田氏の指摘のあった清経入水の場面であるが、彼は最期を迎えるに当たって初めて単独で取り上げられることとなる。

G　平家の方には大将軍小松新三位中将資盛、同少将有盛、丹後侍従忠房、備中守師盛、…（中略）…源氏はおちゆくかたきをあそこにおッかけ、ここにおッつめせめければ、平氏の軍兵やにわに五百余騎うたれぬ。手負ふ者どもおほかりけり。大将軍小松の新三位中将、同少将、丹後侍従、面目なうや思はれけん、播磨国高砂より船に乗ッて、讃岐の八島へ渡り給ひぬ。備中守は平内兵衛、海老次郎を召し具して、一谷へぞ参られける。

（②巻九「三草合戦」一九八～二〇〇頁）

Gは、三種の神器を奪還すべく平氏のいる一の谷に向けて出立した義経らを、平家側が三草山にて待ち構えた、所謂三草合戦の場面である。大将軍の資盛以下、Bで入水した清経以外の四人が兄弟揃って陣をとる。この合戦では結局義経の奇襲に不意を突かれた平家方は惨敗し、資盛・有盛・忠房は本拠地のある八島に一旦引き上げる。一人、備中守師盛のみ兄弟を離れ、従者を具して一谷へと向かう。

H　小松殿の末子、備中守師盛は、主従七人小舟に乗ッておち給ふところに、…（中略）…備中守うきぬ沈みぬし給ひけるを、畠山が郎等本田次郎、十四五騎で馳来り、熊手にかけてひきあげ奉り、遂に頸をぞかいてンげる。生年十四歳とぞ聞えし。

（②巻九「落足」二四〇～二四一頁）

Hは、三草合戦の敗戦後、兄弟から離れて一人一谷へ向かった師盛の最期を伝える場面である。師盛は、再び平氏方の惨敗となった一谷合戦から落ち延びる途中で悲運の最期を迎えたのだった。清経と同様、彼は最期を迎えるに当たって初めて単独で取り上げられるのである。

I　ややあッて、斉藤五涙をおさへて申しけるは、「この一両年はかくれ居候ひて、人にもいたく見知られ候はず。今しばらく

も見参らすべう候ひつれども、よにくはしう案内知り参らせたる者の申し候ひつるは、『小松殿の君達は、今度の合戦には、播磨と丹波のさかひで候なる三草山をかためさせ給ひて候ける。九郎義経にやぶられて、新三位中将殿、小松少将殿、丹後侍従殿は、播磨の高砂より御舟に召して、讃岐の八島へわたらせ給ひて候なり。何としてはなれさせ給ひて候けるやらん、御兄弟の御なかには、備中守殿ばかり一谷にてうたれさせ給て候』と、申す者にこそあひて候ひつれ。『さて小松三位中将殿の御事はいかに』と問ひ候ひつれば、『それはいくさ以前より、大事の御いたはりとて、八島に御渡り候間、此たびはむかはせ給ひ候はず』と、こまぐとこそ申候ひつれ」と申ければ、…　（②巻十「首渡」二五九～二六〇頁）

一谷合戦後、討ち取られた平家勢の首が都に到着し京中にさらされることとなる。維盛が都落ちの際に我が子を託した従者・斉藤五と六の兄弟は、さらされた首の中に維盛もいはしないかと確かめに行く。Iは、戻ってきた斉藤兄弟に維盛の首の有無を問いただす北の方に対して、斉藤五が涙ながらに答える場面である。G・Hでの資盛らの兄弟たちの様子がほぼそのままの形で語られる一方、維盛は体調不良からどちらの合戦にも参加していないということが伝えられる。

J　武里泣くく八島へ参りけり。御弟新三位中将殿（資盛）に御文取りいだして参らせたりければ、…

（②巻十「三日平氏」三一八頁）

Jは維盛の入水に立ち会った舎人武里が八島の平家の館へ戻ってきた場面である。維盛入水の報を聞き、弟の資盛をはじめ宗盛や二位尼の他、平家の人々は涙する。ここに関しては改めて後述する。

K　平家の方には大将軍小松の新三位中将資盛、同少将有盛、丹後侍従忠房、侍大将には、飛騨三郎左衛門景経、…

（②巻十「藤戸」三二八頁）

Kでは、平家追討に西国へ出立した範頼を迎え討つ格好で平家方も陣をとる。ここでは、すでに還らぬ人となった清経と師盛を除く資盛ら兄弟三人が揃って合戦に臨む。

L　小松の新三位中将資盛、同少将有盛、いとこの左馬頭行盛、手に手をとりくんで、一所に沈み給ひけり。

（②巻十一「能登殿最期」三八四頁）

Lは、源平最後の戦いとなった壇ノ浦合戦の最終盤の場面である。激戦の末、敗北が決定的となった平家勢は次々に入水していく。資盛と有盛もいとこの行盛とともに「手に手をとりくんで、一所に沈」んでいったのだった。こうして、資盛と有盛も最期を描かれて物語から姿を消していく。

M　小松殿の御子丹後侍従忠房は、八島のいくさより落ちて、ゆくゑも知らずおはせしが、紀伊国の住人湯浅権守宗重をたのんで、湯浅の城にぞこもられける。…（中略）…（頼朝は）すかし上せ奉り、おッさまに人をのぼせて、勢田の橋の辺にて切ッてンげり。

（②巻十二「六代被斬」四八七～四八九頁）

Mでは、Kの藤戸合戦以来登場のなかった忠房の最期が語られる。八島合戦で生き残った忠房は、紀伊国湯浅城に立て籠もり、そこに残党が集まる。討伐の命を受けた熊野別当が手を焼く中、忠房は頼朝にだまされて投降し、結果斬られることとなる。忠房も清経や師盛と同様、最期を迎えるに当たって初めて単独で取り

上げられるのである。

N　小松殿の君達六人の外に、土佐守宗実とておはしけり。三歳より大炊御門の左大臣経宗卿の養子にして、異姓他人になり、武芸の道をばうち捨てて、文筆をのみたしなんで、今年は十八になり給ふを、鎌倉殿より尋ねはなかりけれども世に憚ッておひ出されたりければ、…（中略）…聖力およばで関東へ下し奉る。此人奈良を立ち給ひし日よりして、飲食の名字をたッて、湯水をものどへいれず。足柄こえて関本と云ふ所にて、つひにうせ給ひぬ。

（②巻十二「六代被斬」四八九～四九〇頁）

続くNでは、養子に出されていた重盛の末子・宗実の死が語られる。宗実は『平家物語』中、これが初出でありながらその最期が描かれることとなる。彼の登場は本場面のみに尽きるのである。平家が倒され頼朝の天下となった世の中にあって、平氏の中心人物であった重盛の実の子であるという危うさから、宗実は養子になった先の家から追い出される。出家するも鎌倉から見参すべき由が下り、以後自らの意志で飲食を断った（断食）ことにより、鎌倉下向の途中にこの世を去ったのだった。こうして、小松家の兄弟の死が一人ももれなく描かれたことになる。

＊

以上、維盛の六人の弟たちの登場場面を追った。養子に出された宗実を除き、資盛以下五人の弟たちはほとんどの場合、行動を共にしていることがわかる。また、宗実を含め維盛の弟たち六人は、それぞれの内面や人格が描かれることはほぼない。唯一その死の場面においてのみ単独で取り上げられるばかりである。平家滅亡への二つの契機とされ、一見特別視されているように見える資盛と清経の場合もまた然りで、彼らが「資盛」であり「清経」であることが重要なのではなく、「小松殿の公達」であることの方にこそ意味があるようである。

「小松殿の公達」の顛末を追っていくことが、平氏の滅亡を辿る『平家物語』において重要な縦軸を成していたと考えられ、重盛を「運命を自覚し、予言する特別の人間」として造型された人物であると捉えた石母田正氏（注7）の指摘が思い起こされる。彼らはそのような重要な役割を担う一方で、平氏滅亡を辿るという意味での「小松殿の公達」以上の役割は与えられなかったのである。そのように考えると、彼らの兄弟揃っての行動は、「小松殿の公達」という括りで一緒くたにまとめられた結果と言えるであろう。

ここで注目したいのは、彼ら兄弟に対する維盛の位置である。今述べたように、ほとんどの場合、資盛以下五人が兄弟揃って行動するのに対し、長男の維盛がその輪に入ることは極めて少ない。「維盛以下の公達」のようにセットにされたB・Cの他、D・Eの都落ち場面においては迎えに来た弟たちと維盛が合流し、兄弟六人で都を落ちて行ったことになるわけだが、出立の遅れた維盛と彼を急かしに来た資盛らはいわば連れられていく者と連れていく者であって、兄弟揃ってという感は薄い。

同じ重盛の子息とはいえ、平家の嫡流である維盛は『平家物語』中でも一際熱心に筆が割かれており、彼には彼独自の物語構想上の人物造型が成されているというのはいうまでもない。よって弟たちと同じレベルで「小松殿の公達」として扱われることがないのは、当然と言えば当然であろう。しかし、維盛と弟たちとの間にある距離感というのは、どうもそれだけでは片づけられないも

のがある。

そこで以下、Jにおける資盛の言動に着目したい。Jは先述の通り、維盛の入水後八島で兄の訃報を聞かされた資盛が嘆き悲しむ場面である。

J　武里泣く〳〵八島へ参りけり。御弟新三位中将殿（資盛）に御文取りいだして参らせたりければ、「あな心憂、わが頼み奉る程は、人（維盛）は思ひ給はざりける口惜しさよ。池の大納言のやうに頼朝に心をかよはして、都へこそおはしたるらめとて、大臣殿も二位殿も、我等にも心をおき給ひつるに、されば那智の興にて身を投げてましますごさんなれ。さらば引具して一所にも沈み給はで、所々にふさむ事こそかなしけれ。御詞にて仰らるる事はなかりしか」と問ひ給へば、★「申せと候ひしは『西国にて左の中将殿（清経）うせさせ給ひ候ひぬ。一谷で備中守殿（師盛）うたれさせ給ひぬ。われさへかくなり候ひぬれば、いかにたよりなうおぼしめされ候はんずらんと、それのみこそ心苦しう思ひ参らせ候へ』。唐皮・小鳥の事までもこま〴〵と申したりければ、「今はわれとてもながらふべしとも覚えず」とて、袖をかほにおしあててさめ〴〵と泣き給ふぞ、まことに理と覚えて哀れなる。故三位中将殿（維盛）にゆゆしく似給ひたりければ、見る人涙をながしけり。

（②巻十「三日平氏」三一八～三一九頁）

兄・維盛の訃報を知らせる文を読んだ資盛は、「あな心憂、わが頼み奉る程は、人は思ひ給はざりける口惜しさよ」と嘆く。自分が頼みにしている程には、維盛は自分を想ってはくれていなかったのだ――この資盛のことばは、兄・維盛への想いを吐露した最初にして唯一のものであろう。そう、ここまでにおいて維盛と弟たちとの内面的なやりとりのようなものは決して描かれることはなかったのである。

資盛は兄を頼りにしていた。それは八島における彼ら小松家の弟たちの境遇によるところが大きいと思われる。すなわち、密かに八島の平家の館を抜け出し高野山へ上った維盛は、平家の人々からしてみればずっと行方知れずの人物であった。資盛のセリフによれば、そんな維盛は都落ちの際に頼朝に心を通わして都に残った頼盛のようにきっと頼朝に寝返って都にいるのであろうと疑われていたらしい。「大臣殿も二位殿も、我等にも心をおき給ひつるに」とは、そんな兄への疑惑から資盛ら弟たちも疑いの目を向けられ、平家一門内で孤立した存在となっていたことを意味するのだろう。

そもそも維盛へのこのような疑惑は彼が八島の館を出る前から既に生まれていたらしく、高野山に登り滝口入道に面会した維盛の口から「大臣殿も二位殿も、『此の人は池の大納言のやうに二心あり』なンどとて、思ひへだて給ひしかば」（②巻十「高野巻」三〇〇頁）と似たようなことが述べられている。維盛が実際に姿を消したことで疑惑は確信へと変わったのであろう。維盛失踪後、資盛ら小松家の弟たちが一門の中でどれほど心細い思いをしていたかは容易に想像出来よう。そんな彼らは兄の無実を信じて待つほかない。彼らは居場所のない八島の館で維盛を頼りにその帰りを待っていたのではないだろうか。

さらに資盛は「さらば引具して一所にも沈み給」ふこと―つまり高野山へ向かった維盛に随行し、共に一所で死ぬことを望んでもいる。維盛と共に小松家の兄弟として最期の時を共有することを望んでいたのである。

資盛の想いは兄に届いていたのか。答えは否であろう。「御詞にて仰らるる事はなかりしか」と尋ねた資盛に対して、武里が伝えた維盛の伝言の内容は、清経・師盛に続き自分までも死ぬことについて「いかにたよりなうおぼしめされ候」と「それのみこそ心苦しう思」ふのだということであったが（★以下）、実はこれは特別に資盛や弟たちに対して遺されたものではない。

これは、巻七「維盛出家」において維盛が武里に語ったことばをそのまま繰り返したもので、武里の口を介しているために敬語に直されているもののほぼ同文である。該当箇所を以下に挙げる。

（維盛出家直後）舎人武里を召して、「おのれはとう〳〵これより八島へかへれ。都へはのぼるべからず。そのゆゑは、遂にはかくれあるまじけれども、まさしう此有様を聞いては、やがて様をもかへんずらむとおぼゆるぞ。八島へ参ッて、人々に申さむずるやうはよな、『かつ御覧候ひしやうに、大方の世間もものうきやうにまかりなり候ひき。よろづあぢきなさもかずそひてみえ候しかば、おの〳〵にも知られ参らせ候はで、かくなり候ひぬ。西国で左の中将うせ候ひぬ。一谷で備中守うたれ候ひぬ。われさへかくなり候ひぬれば、いかにおの〳〵たよりなうおぼしめされ候はんずらむと、それのみこそ心苦しう思ひ参らせ候へ。抑唐皮といふ鎧、小烏といふ太刀は、平将軍貞盛より当家につたへて、維盛までは嫡々九代にあひあたる。若し不思議にて世もたちなほらば、六代（維盛の嫡子）にたぶべし』と申せ」とこそ宣ひけれ。

（②巻十「維盛出家」三〇六～三〇七頁）

そこでは「八島へ参ッて、人々に申さむずる」こととして語られており、特別に資盛に遺されたことばではないことがわかる。維盛にとっては、資盛ら弟たちは平家一門の人々に含まれる存在でしかなく、個別にことばを遺すほどには位置付けられてはいないらしい。維盛の死を嘆き悲しむ資盛の姿は、「故三位中将殿にゆゆしく似給ひたりければ、見る人涙をながしけり」とされ、面立ちのよく似た兄と弟として人々の涙を誘う。血を分けた兄弟としての維盛と資盛が意識される箇所だが、物語中、結局彼らの間で親しい交流が結ばれることはない。少なくとも維盛の側から見た維盛と実弟との間には埋めがたい距離があるのである。

このような関係の背景には何があるのだろうか。それは弟たちが重盛を父に持つ、小松家の実弟であるという事実に関係していると考えられる。彼らは嫡流の重責に苦しむ維盛にとって、小松家の長男であることを意識させずにはおかない存在である。つまり、維盛は弟たちを小松の〈家〉と切り離して考えることは出来ないのである。たとえ資盛が兄と一所での死を望もうとも、彼らが一所で死ぬことは「小松殿の公達」として死ぬことを意味する。〈家〉の重圧から自由になることを望む維盛は、だからこそ最期を迎えるにあたり資盛を連れて行くことはなかったのである。

五、維盛の最期に寄り添う者

維盛が最期の時を共有する人物として選んだのは誰か。

さる程に、小松の三位中将維盛卿は、身がらは八島にありながら、心は都にかよはれけり。故郷に留めおき給ひし北の方、をさなき人々の面影のみ、身にたちそひて、忘るるひまもなかりければ、「あるにかひなきわが身かな」とて、元暦元年三月十五日の暁、しのびつつ屋島の館をまぎれ出でて、与三兵

衛重景、石童丸と云う童、船に心得たればとて武里と申す舎人、是等三人を召し具して…（中略）…高野の御山に参られけり。

（②巻十「横笛」二九五～二九六頁）

妻子を想い苦悩する毎日からの解放を求めてとうとう八島の館を抜け出した維盛は、平家一門から離れ高野山に向かう。このとき維盛が召し連れていったのが与三兵衛重景と石童丸、舎人の武里の三人の従者であった。

既に触れたように（前項のJ場面）、舎人の武里は維盛の最期を見届け、八島にいる平家一門の人々に維盛の死を伝えるという重要な役割を担っている。一方、与三兵衛重景と石童丸は維盛と共に出家・入水していく人物である。維盛に最後の最後まで寄り添う存在といえる。

維盛と共に那智沖に身を沈めたこの二人の従者を捉えることは、維盛という人物を考える上で欠くことの出来ない重要な要素であろう。以下、与三兵衛重景と石童丸の人物像とともに彼らと維盛との関係を捉えていく。ちなみに、石童丸は与三兵衛重景に付随するかたちで登場するばかりで彼自身の言動や心情描写が描かれることはほぼないので、自然、考察の対象は与三兵衛重景が中心となる。

（1）父・重盛に結ばれた絆

与三兵衛重景と石童丸が続いて登場するのは維盛出家の場面である。維盛は剃髪に臨み、与三兵衛重景と石童丸に向かって次のように言う。

出家せんとし給ひけるが、三兵衛、石童丸を召して宣ひけるは、「維盛こそ人しれぬ思を身にそへながら、道せばうのがれがたき身なれば、むなしうなるとも、此比は世にある人こそおほけれ、汝等はいかなる有様をしても、などか過ぎざるべき。われいかにもならんやうを見はてて、いそぎ都へのぼり、おの〳〵が身をもたすけ、且つうは妻子をもはぐくみ、且つうは又維盛が後生をも訪へかし」と宣へば、二人の者共さめ〴〵と泣いて、しばしは御返事にも及ばず。

（②巻十「維盛出家」三〇三～三〇四頁）

維盛は二人に向かって、自分が死んだならば「いかなる有様をしても」生き延び、それぞれに生計を立て妻子を育み、また自分の後生をも弔ってくれ、という。維盛は彼ら二人に対して、主君である自分と一所で死ぬことなく何としてでも生き延び、自らの人生を生きてほしいというのである。維盛のこのセリフからは、先に触れた都落ちの際の北の方への説得を思い起こさずにはおけない。これは、川田正美氏（注8）も指摘するところである。

此人々（維盛の妻子ら）皆おくれじとしたひ給へば、三位中将宣ひけるは、「日比申し様に、われは一門に具して西国の方へ落し行くなり。いづくまでも具し奉るべけれども、道にも敵待つなれば、心やすうとほらん事も有がたし。たとひわれうたれたりと聞き給ふとも、様なンどかへ給ふ事はゆめ〳〵あるべからず。そのゆへは、いかならん人にも見えて、身をもたすけ、をさなき者共をもはぐくみ給ふべし。情をかくる人もなどかなかるべき」と、やう〳〵になぐさめ給へども、…

（②巻七「維盛都落」六七頁）

維盛は北の方に対して、たとえ自分が討たれるようなことがあっても決して出家してはならない、「いかならん人にも見え」―つまり再婚し、生計を立てて子どもたちを育てあげよ、というので

ある。北の方に発せられたことばと同じ思考が重景・石童丸にも働いている。「身をもたすけ」「をさなき者共をもはぐくみ」など、一致あるいは類似した表現が使用されている点から見ても両者の対応を見出してよいであろう。維盛の妻子への傾倒ぶりは先に述べた通りであるが、その妻子に向けられたものと同程度の想いが重景らに対して向けられていると考えてよいのではないだろうか。だとすれば、やはりこの二人の従者は維盛という人物にとって重要な位置を占めていると見なければなるまい。

一体、与三兵衛重景とは維盛にとってどのような存在であったのか。それはこの直後の与三兵衛重景のことばによって明かされる。

ややあッて、与三兵衛涙をおさへて申けるは、「重景が父、与三左衛門景康は、平治の逆乱の時、故殿（重盛）の御供に候けるが、二条堀河の辺にて、鎌田兵衛にくんで、悪源太にうたれ候ひぬ。重景もなじかはおとり候べき。其時は二歳に罷りなり候ひければ、すこしも覚え候はず。母には七歳でおくれ候ひぬ。哀れをかくべきしたしい者一人も候はざりしかども、故大臣殿、『あれはわが命にかはりたりし者の子なれば』とて、御まへにてそだてられ参らせ、生年九つと申しし時、君の御元服候ひし夜、頭を取りあげられ参らせて、かたじけなく、『盛の字は家の字なれば五代（維盛）につく。重の字をば松王に』と仰せ候ひて、重景とは付けられ参らせて候なり。其上わらは名を松王と申しける事も、生れて忌五十日と申し時、父がいだいて参りたれば『此家を小松といへば、いはうてつくるなり』と仰せ候ひて、松王とはつけられ参らせ候なり。父のようて死に候ひけるは、わが身の冥加と覚え候。随分同隷共にも芳心せられてこそまかり過ぎ候ひしか。されば御臨終の御時も、此世の事をばおぼしめし捨てて、一事も仰せ候はざりしかども、重景御まへちかう召されて、『あなむざんや。汝は重盛を父が形見と思ひ、重盛は汝を景康がかたみと思ひてこそすごしつれ。今度の除目に靭負尉になして、おのれが父景康をよび様に召さばやとこそ思ひつるに、むなしうなるこそかなしけれ。相構へて少将殿（維盛）の心にたがふな』とこそ仰候しか。

（②巻十「維盛出家」三〇四～三〇五頁）

与三兵衛重景の父は、維盛の父・重盛に仕え、平治の乱の際に重盛の危急を救い、身代わりとなって討たれた人物であるという。その後、天涯孤独の身の上となった重景を、重盛は「あれはわが命にかはりたりし者の子なれば」と、我が子同然に育てたのであった。また、重盛は嫡子・維盛の元服と同じ日に重景の元服も執り行い、また自らの名の「重」を採り「重景」の名を与えたという。そもそも、「松王」という彼の幼名も、重盛が彼の誕生を祝して、「小松家」から採って名付けたものであったらしい。

重盛が元服の際に「重」の字を与えたこと自体は何も特別なことではない。元服においてそれまでの幼名を改め烏帽子名を付けることになるが、一字拝領といって父祖の名や烏帽子親の名、または主君の名を採るのが中世の武家社会では一般的だったらしいからである（注9）。見過ごせないのは「盛の字は家の字なれば五代につく。重の字をば松王に」と言ったセリフに見える、重盛の意識である。彼は、嫡子である維盛には平家を象徴する字であろう「盛」の字を、重景にはもう一方の「重」の字を、と言う。「家の字」でなければ重景に「盛」をつけてもいいくらいに聞こえる。

重盛は、嫡子である維盛と一部下に過ぎない重景とを並列にし、自分の名を両者に同じように分け与えようとの意識でいるらしいのである。重盛の中では維盛と重景はほぼ同レベルで扱われているわけで、これは、たとえ我が子同然に育てたにせよ、一部下に対する扱いの範疇を超えている。重盛にとって重景の存在はやはり特別であり、またその父・景康の存在が重盛にとってどれほど大きかったかが窺い知れるであろう。

与三兵衛重景が特別な存在であるのは維盛にとっても同様である。程なく明かされる維盛と重景の年齢に注目したい。

三位中将も兵衛入道も同年にて、今年は廿七歳なり。石童丸は十八にぞなりける。（同三〇六頁）

二人は同い年なのである。「松王」という重景の幼名の由来を語る際に「五十日と申しし時」とある通り、重景は生まれたときから小松家に仕え、そこで育ってきた身である。自然、生まれたときから同い年の維盛に仕え、共に育ち、時を過ごしてきたのであろう。そうして先に挙げた重景のセリフに戻ってみると、維盛と重景は九歳の折節、同じ日に父・重盛の手によって元服し父の名から一字ずつそれぞれ賜った、重盛の名を分かつ間柄であり、片や嫡子、片や従者の身ではありながら父・重盛の愛情を共有して育った主従なのであった。重景が語ったエピソードは、重盛との思い出を辿るものであると同時に、維盛と刻んできた歴史でもあるのだ。

重盛はもはや何も語らなくなった臨終の間際、重景を近くに召して「汝は重盛を父が形見と思ひ、重盛は汝を景康がかたみと思ひてこそすごしつれ」と、重景への並々ならぬ想いを語り、最後に「相構へて少将殿の心にたがふな」と遺言したという。重景に心からの信頼を寄せ、大切な嫡子・維盛を託したのである。死の直前の重盛の心の中には愛息・維盛と重景がいた。その重盛から賜った最後の命令が維盛にどこまでも仕え抜くことであった。維盛と重景とは重盛の愛情の下、強固な絆で結ばれた主従なのである。

（2）「少将殿の心にたがふ」た重景

重景のことばは続く。

されば此日来は、いかなる御事も候はむには、見すて参らせて落つべきものとおぼしめし候ひけるか。御心のうちこそ恥づかしう候へ。「このごろは世にある人こそおほけれ」と仰せかうぶり候は、当時のごとくは源氏の郎等どもこそ候なれ。君の神にも仏にもならせ給ひ候ひなむ後、たのしみさかへ候とも、千年の齢をふるべきか。たとひ万年をたもつとも、遂には終のなかるべきか。是に過ぎたる善知識、何事か候べき」とて、手づからもとどりきッて、泣く〳〵滝口入道にそらせけり。石童丸も是を見て、もとゆひぎはより髪をきる。これも八つよりつき奉ッて、重景にもおとらず不便にし給ひければ、同じく滝口入道にそらせけり。

（②巻十「維盛出家」三〇五～三〇六頁）

自分は決して主君を見捨てて逃げることはない、という重景のこのセリフには最後まで維盛に仕え抜こうとする彼の忠義がよく表れていよう。

重景は、主君亡き後たとえ自分だけ生き延び栄えたところで虚しいだけだ、として「手づからもとどりきッて」剃髪を果たす。

また「重景にもおとらず」維盛から可愛がられていた石童丸も、それに続いて自ら髪を切ってしまう。彼らは、自分に構わず自らの人生を生きろと言った維盛の願いを無視し出家を果たしてしまったのである。

維盛は重景ら従者にも北の方と同様、生きることを望んでいた。彼のナイーブさはこれまで見てきた通りだが、維盛は自分のせいで愛する者の人生を左右するのが耐えられなかったのではないだろうか。しかし、そんな維盛の願いに反して重景と石童丸は出家してしまった。彼らは「相構へて少将殿の心にたがふな」との重盛の遺言に、（恐らくこの時初めて）背いたのである。

「少将殿の心にたがふ」た重景だが、主君を裏切ったことには決してなるまい。彼はただ彼なりの方法で維盛への想いを形にしただけだ。重景は重盛の遺言を遂行するという従者としての責務を飛び超えて、自らの手で維盛に最後まで寄り添う道を選び取ったのだ。彼は維盛と運命を共にすることを選び、かつて重盛によって結ばれたものを凌駕する絆を示してみせたのである。

こうして、かつて重盛によって結ばれた関係が重景の手で新たな絆として結ばれることで、重盛の手から離れた、新しい主従の絆が維盛と重景との間に生み出されたのである。

＊

与三兵衛重景と石童丸の剃髪を受け、いよいよ維盛出家の時が訪れる。

是等がかやうに先だつてなるを見給ふにつけても、いとど心ぼそうぞおぼしめす。さてもあるべきならねば、「流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者」と三返唱へ給ひて、遂にそりおろし給ひてンげり。「あはれ、かはらぬ姿をこひしき者共に今一度見えもし見て後、かくもならば、思ふ事あらじ」と宣ひけるこそ罪ふかけれ。三位中将も兵衛入道も同年にて、今年は廿七歳なり。石童丸は十八にぞなりける。

（同三〇六頁）

維盛が二人の従者の出家を受けて「いとど心ぼそう」なったのは、目下の者に先を越されたというだけの理由ではないだろう。維盛は自分に対する重景らの並々ならぬ想いを汲み取りつつも、いやそれが痛いほどわかるからこそ、彼らが自分と共に死んでいく道を選んだことに対して「心ぼそう」なったのではないだろうか。たとえそれが重景らの望みだとしても、大切な者が死ぬのがやはり悲しい。彼らを巻き込んでしまった自分という存在が残念でならない。

また、維盛自身はこの時点（重景らの出家直後）ではいまだに出家を躊躇していたと考えてよい。自らの剃髪直後でさえ「かはらぬ姿をこひしき者共に今一度見えもし見て後、かくもならば、思ふ事あらじ」――出家前に「かはらぬ姿」のまま妻子と再会しておきたかったとこぼしており、妻子への愛執を断ち切ることのできぬままに出家を遂げてしまっている（だから「罪ふかけれ」なのだ）。当然、その前も出家に踏み切れずにいたと見るべきであろう。しかし二人の従者が出家を遂げてしまったことで、躊躇していた維盛は「さてもあるべきならねば」、後押しされるように出家を遂げるのである。重景らの出家が維盛に出家せざるを得ない状況を作り出したとも言える。維盛が「心ぼそう」なったのは、もう後戻り出来ない、「かはらぬ姿のまま」妻子らと再会することはもはや実現不可能となった状況に対しての「心ぼそ」さでもあったのではないだろうか。

維盛は出家を遂げるも、最後まで妻子への愛執を断ち切ることが出来ず苦悩し続ける。

「ふる郷にとどめおきし妻子安穏に」といのられけるこそかなしけれ。うき世を厭ひ、まことの道に入り給へども、妄執はなほつきずと覚えて、哀れなりし事共なり。

（②巻十「熊野参詣」三〇九頁）

念仏をとどめ合掌を乱り、聖にむかッて宣ひけるは、「あはれ人の身に、妻子といふ物をばもつまじけるものかな。此世にて物を思はするのみならず、後世菩提のさまたげとなりける口惜しさよ。只今も思ひ出するぞや。か様の事を心中にのこせば、罪ふかからむなる間、懺悔するなり」とぞ宣ひける。聖も哀れに覚えけれども、我さへ心よわくてはかなはじと ひ、涙おしのごひ、さらぬ体にもてないて申しけるは、…

（②巻十「維盛入水」三一三～三一四頁）

この入水間際の維盛の懺悔に対して、滝口入道も涙しつつ「我さへ心よわくてはかなはじ」と自らを奮い立たせ、維盛に往生を遂げさせるべく以降長い説教を展開する。滝口入道の説教は「成仏得脱してさとりをひらき給ひなば、娑婆の故郷にたちかへッて、妻子を道びき給はむ事、還来穢国度人天、すこしも疑あるべからず」（②三一六頁）との一文で締めくくられる。「成仏得脱」すれば妻子をも導くことが出来る――これを聞いて、

中将しかるべき善知識かなと思食し、忽ちに妄念をひるがへして、西に向かひ手を合せ高声に念仏百返計となへつつ、「南無」と唱ふる声共に、海へぞ入り給ひける。兵衛入道も石童丸も同じく御名を唱へつつ、つづいて海へぞ入りにける。

（②巻十「維盛入水」三一六頁）

ようやく維盛は「妄念をひるがへし」、重景・石童丸と共に入水を遂げるに至るのである。

六、〈家〉からの解放を望んだ維盛

平重盛の嫡子として生まれ、次代の平家を担う嫡流として育てられながらも、相応の地位に就くことも武将として活躍することもなく、最終的には平家一門から離れ、ひっそりと悲運の最期を迎える維盛。『平家物語』が描こうとするのは、平家の嫡流という重責を背負いつつも力及ばず、そんな重圧をもたらす〈家〉に背を向けてただ愛する者を想い苦悩する、一人の人間・維盛である。

維盛が愛したのは、謀反人・成親卿の娘である我が妻とその子どもたちであった。謀反人の血縁として平家一門内で孤立し、平氏の〈家〉から切り離された存在であった彼らは、嫡流の重圧に苦しむ維盛が〈家〉から解放され得る、ほとんど唯一の心の拠り所だったのである。

維盛は都落ち後、生きる希望もなくただ苦悩する毎日からの救済を求めて、八島の館を抜け出し高野山に向かう。この八島からの逃亡は、平氏の〈家〉からの脱出であり嫡流という重圧からの逃避であったのではないだろうか。嫡流という立場にありながら度重なる大将軍としての失敗、「二心ある者」と疑われ居場所のない八島の館。しかし心の拠り所である愛する妻子のいる都に行くことも出来ない。維盛は八島の館を抜け出し、〈家〉から離れた一人の人間・維盛として最期の時を迎えようとしたのだ。

そんな維盛は、資盛ら弟たちにも背を向けざるを得なかった。同じ重盛を父に持つという事実は、維盛に小松家の長男であるこ

と――つまりは嫡流としての立場を意識させずにはおかないからだ。たとえ資盛が兄と一所での死を願おうとも、維盛は「小松殿の公達」として死ぬことを望まなかった。維盛は嫡流としての小松の〈家〉からも自由になりたかったからである。だからこそ高野山に資盛を連れて行くことはなかったのである。

維盛が最期を迎えるに当たって召し連れて行ったのは、与三兵衛重景と石童丸ら、そばでずっと可愛がってきた従者たちであった。中でも重景は、かつて父・重盛によって結ばれた関係である。しかし主君の出家に際し、重盛の遺言に反して維盛の命令を無視してしまう。そうして自らの手で維盛に最後まで仕え抜くことを選び取った与三兵衛重景の行為によって、維盛と重景の間に新たな絆が結び直された。それによって父・重盛の手から離れた、新しい主従の絆が生み出されたのである。彼はしがらみや義務感を超えたところで結ばれたこの二人の従者とともに、〈家〉から自由になった一人の人間・維盛として最期の時を迎えたのである。

注

（1）周知のように『平家物語』には多くの異本が存在するが、本稿においては覚一本を考察の対象とした。考察対象、および本文引用はすべて東京大学国語研究室所蔵の『平家物語』（旧高野辰之氏所蔵。通称、高野本、覚一別本）を底本とする『新編日本古典文学全集　平家物語①②』（小学館）の本文に拠る。引用した本文には私に傍線や中略、補足を附した。本文の後ろには巻数・章段名・頁数を示した。

（2）宮田尚「維盛の栄光と挫折―『平家物語』人物評伝―」（『文学における二十代』、笠間書院、一九九〇年二月）

（3）鈴木則郎「『平家物語』における平維盛像についての一考察」（『東北大学文学部研究年報』第二十九号、一九八〇年三月）

（4）川田正美「『平家物語』における平維盛像」（『日本文学誌要』第三十四号、一九八六年六月）

（5）維盛が妻子を都に残したことに関するこのような見解は、永原慶二氏（「平家物語人間像と史実との対決・維盛」『国文学解釈と鑑賞』第二十二巻第九号、一九五八年九月）をはじめ、鈴木則郎氏（注3論文）、鈴木智子氏（「「平家物語」における維盛像」『藤女子大学国文学雑誌』第四十六号、一九七四年五月）、川田正美氏（注8論文）ら多くの先学によって示されており、小松家を捉える際の共通認識となっていると言ってもよいくらいである。

（6）石母田正著『平家物語』（岩波新書、一九五七年）

（7）石母田氏著の注6に同じ。

（8）川田正美氏の注4論文に同じ。

（9）『角川古語大辞典』を参照。以下に引用する。

【えぼしな（烏帽子名）】

元服の際に、幼名を改めて付ける名。幼名は武家では、何丸・何若などというのが普通である。元服のとき、一字拝領といって父祖の名や烏帽子親の名、また主君の名などを取り、これに、太郎・次郎などの通称をつけることが多い。

【えぼうしおや（烏帽子親）】

中世、武家社会で、男子元服の際、烏帽子をつけさせる人の称。将来を託すべき有力者を仮の親と頼み、烏帽子を着

せてもらい、烏帽子名をつけてもらう風習があった。江戸時代、烏帽子を用いぬようになっても、武家・庶民ともに元服に際して立てる仮の親をいう。烏帽子子の対。「えぼしおや」とも。

（はせがわ・やすこ／東京学芸大学大学院修士課程）